

アマテラスと天皇〈政治シンボル〉の近代史 千葉慶著

評・三浦 佑之（古代文学研究者）
（立正大教授）

今年が古事記編纂1300年にあたるというので、世の中はいささか浮かれ気分。成立のいきさつを記した古事記「序」は疑わしいと言いつつお祭りの神輿をかつぐ私が言つて

祭り上げられたシンボル

り」で知られる「世直し」神アマテラスを宗教シンボルに据えることであつ



吉川弘文館
1800円

た。天皇家の祖先神として伊勢神宮に祀られる太陽神アマテラスから連綿と続く天皇を君主とする自分たちは、「世直し」革命を果たした正当な統治者であるというわけだ。そして後には、欧米並みの近代国家へと脱皮すべく、軍服姿の明治天皇を前面に押し出して元帥天皇が統治する近代国家を作り上げていった。

も説得力は弱い、その今年こそ、近代国家が作り上げた「政治シンボル」としてのアマテラス（天照大神）や神武天皇について、きちんと考えてみるチャンスではないか。徳川幕府を倒して成立した維新政府は、どうすれば新しい国家が人々に不満なく受け入れられるかということに腐心する。そのために求められたのが、著者のいう「政治シンボル」であった。具体的にいうと、法や諸制度を西欧から借用して近代国家「日本」を作り上げようとした明治政府は、古代の遺物ともいえる天皇制に新たな装いをほどこし、それを

求心力として国民の心を一つにし

ようとしたのである。そのあたりの状況を、本書は丹念に掘り起こす。

はじめ、神武天皇を政治シンボルに据えた維新政府だが、明確な像を持たない初代天皇は人々のあいだに定着しにくかった。そこで考えられたのが、幕末に流行した「おかげ参り」で知られる「世直し」神アマテラスを政治シンボルとして際立たせる論述はとて新鮮で、なるほどと思わせる。

◆ちば・けい 1976年、千葉県生まれ。大学非常勤講師。共著に『ひとなぜ乳房を求めるのか』。